

次に右の御書は御遺文中に於て、如何なる地位に在るものであるかと云ふに、総べてが、法義に關した御書であつて、而も、觀心的傾向の御書が多い、故に、御遺文中の主要の地位にあるものである、

## 精 進

川 口 智 隨

私は日蓮大上人の御遺文及諸先哲の訓言に依りまして精進と云ふ事に就て御話を致します精進とは如何なる事であるかと申しますれば御經文の中にも勇猛精進と御説きになりまして撓まず屈せず進むのか精進であると御教誡にあつて居るのであります徳川家康は人の一生は重き荷を負て遠き道を行くか如し急げば必ずつまづく事あり。と申されて居ります吾々人生と云ふ者は恰度重い處の荷物を負つて遠い道を行く様を物であつて急いだなら必ず重荷を負つて居る事あれば其の目的地に達

する事は出來ずして途中でつまづいて倒れてしもうのである百里の道も一步より初つて居るのであるから一步一步と歩みを運ばなければ遠い目的地に達す事は出來ないのであります又『孔子曰譬へ如レ爲レルカ山ヲ未レ成一簣ニシテ止ムハ吾レ止ム也譬へ如レ平地雖レ覆スト一簣ヲ進ムハ吾レ往ク也』と申され學問と云ふ者は山を作る様な物である今一簣を以て其の山か出來上ると云ふ時にあつて止めると云ふのは自分か止めるのである地を平にするのに未だ一簣を覆ただけであつてもそれを撓まず屈せずして進んで行くと云ふのは即ち自分か進のである故に學問をするにも淺きより初めて撓まず屈せず勇猛精進の心を以て孜々として吾々の目的地に達せねばならんであります禮記の中には嘉肴ありと雖も食はざれば旨き事を知らず至道なりと雖も學ばざれば其の道を知らずと云ふ事があります如何に山海の珍珠で味か宜しいと申しても食べて見なければ其の美味さは解りません又何程結構なる道かありましても勉強をいたしませんければ其の道を得

ると云ふ事は出来ません世の中には食はず嫌ひと云ふ人かありまして僕は食べて見ないけれども嫌ひである全躰食べて見ずに嫌ひの好きのと云ふ事は云へぬ筈であります又佛法は何だか知らんか氣にくわぬ何故かと聞きますると何だか知らんか嫌ひであると云ふ人か澤山ありますこれは大なる誤解でありまして善惡は學んだ上でなければ批評する事は出来ない筈であるのにもかゝわらず食わず嫌ひの人が法華經の何物かを知らずして譯も解らずに法華經は厭ひであるつまらん宗旨であると誹謗する是れか所謂食わず嫌ひの人であります其の人か一度法華經は諸經中王最爲第一であり法華經以外の諸經は未顯眞實の經であり法華經こそ釋尊出世の本懷を御説にちつた顯眞實の經である諸宗無得道法華獨り即身成佛か出来るのであるとの有難い御話を聞き又自分で宗祖の御遺文等を研究して見れば如何にも法華經の有難い事か解るのであります其の有難い御話を聽聞する時は燃へ立つ様に思へども遠ざかるにつけ忘れて信仰の信の字

も無くあるのであります故に大上人皆此經を信じ初むる時は信心有る様に見へ候か中程は信心弱く僧も恭敬せず供養もなせず自慢して惡見をさす此れ恐るべし〳〵始より終まで彌々信心致すべし左かくして後悔やあらんずらん譬へば鎌倉より京へは十二日の道也それを十一日歩みて殘りの一日にかつて歩を差し置いたなら何として都の月を詠める事か出来様出来ないから十二日道は矢張十二日を以て歩まなければ脱線して其の目的地に達する事は出来ぬ故に足許に氣をつけて疲れの出ぬ様にして彼岸に到達せよとの御教であります佛道修行も亦以て如斯き者であるから從淺至深にして不撓不屈の勇猛精進の心を以て宗祖の御本意に適ふべし寺と言わず佛壇の前と言わず修行か肝要であります故に吾には宗祖の御遺文は勿論諸先哲の訓言に依つて勇猛精進の字を忘れずに學問修行を怠つてはならぬのであります已上